白魔に負けてたまるか！
"ブル"大活躍

十五日昼下りより降り始めた雪が西蒲地方一円に一m近くも積もり各方面に大混乱、当村でも孤立化寸前の部落も現われる状態。村内小中校も十六日臨休したが、平常回復にブルドーザーの出動により他町村より早かった。昭和三十八年記録的な豪雪で「村にブルドーザーがあったら……」の要望で四五〇万円で購入し豪雪に対する備えがあったもので十五日直ちに午後八時役場内に除雪対策本部が設置されて、係員全員が動員されて三日間昼夜兼行で村内主要道路確保、部落間連絡道路確保と大活躍、今後も出動し雪害に対処しますが道路上に自動車駐車、物を放置せず除雪対策がスムーズに行なわれるよう村民各位の御協力をお願い致します。

警報機が設けられます
──原津雲田踏切──

来る二月二十四日から原津雲田踏切に警報機が設けられ踏切事故防止に活躍することになりました。その工事中踏切を通行される皆様に御迷惑をおかけいたしますが、しばらくの間御辛抱お願いいたします。この踏切は、今迄各所に設けられた警報機とずい分変った警報機なのでその概要をお知らせしいて皆様から取扱方を知っていただき、踏切事故を防ぎたいと思います。

1、名称は、第一種重力踏切しゃ断機といいます。

2、警報電鈴としゃ断機を組合せたもので、列車が通らないときは常にしゃ断機は降りています。

3、その状態で列車が来たときは、警報（カンカン）が鳴り、しゃ断機は降りたままです。

4、列車が踏切を通過した後、通行者が手でハンドルを回し、しゃ断機を上げて通行します。

5、上げられたしゃ断機は次の列車が来るまで上げられたままになっています。

6、次の列車が一定の距離に来ると、カンカンが鳴り出し、しゃ断機は自動的に降ります。

7、列車の通過後通行者がハンドルを回してしゃ断機を上げ通行する……というように3から6までの動作が繰り返されます

8、踏切装置が故障のときはしゃ断機は自動により降下します。こんなときは一刻も早く駅に連絡して下さい。（岩室駅長）

農地被買権者給付金 請求は三月末日迄

昭和四十年十一月より請求が始まり、昭和四十二年一月現在で、認定件数三二五件認定額四〇七二六千円で、あります。請求期限は昭和四十二年三月三十一日まででありますので、未だ請求しない者は、早めに農業構造改善へ請求して下さい。

赤十字の献血運動にご協力下さい

献血日時場所
二月三日午前九時より午後四時　和納小学校

皆さんありがとう
善意の贈りもの続く続くと

○旧蠟十二月十七日、間瀬在住の篠原一郎氏より玩具用自動車四台（価格五千円相当）を寄附され幼児達は悦んで遊んでおります。深く感謝いたします。

○昨冬クリスマスプレゼント用品として間瀬保育所母の会（代表田中菊代さん）では、楽しいクリスマスを幼児たちに過させようと贈りものにみんな嬉々として一日中悦んでおりました。

○石瀬本間十郎氏母堂が昨十二月二十六日死亡されその香典返しとして三万円を村の社会福祉に使用して下さいと寄附されました。その趣旨を尊重して有益に使用させていただきます。

○岩室の山のお寺様で知られている方丈様（上村大心氏）から寒念仏の寒行で得られた浄財を村の社会福祉へと二千円寄附されました。お礼申上げます。

第三日曜は家庭の日

青少年の健全育成のためには、青少年の最も身近かな生活の場である家庭とこれを取りまく地域の人々を基盤とした。いわば「地域ぐるみ」の活動をおし進めることが毎月第三週の日曜日が家庭の日として、この日は家族全員が協力しあったり話し合いで明るい家庭の建設に尽力いたしましょう。次に参考までに二月の「家庭の日」のテーマを記載してみました。

2月の家庭の日テーマ	寒さに負けない健康な体をつくるとともに，事故に対する心構えを育てる。					
こよみ	行事	明るい家庭作り（家庭の日）の行事例				あなたの家庭での計画
		話し合い活動	レクリエーション	家庭作業	地域行事	
節分(3日) はつうま 建国記念日(11日) 火災予防	・豆まき ・初うま ・建国記念日	火事の恐しさ 入学試験の心がまえ 心と健康とは 就職の心構 ふゆの衛生 はじめての建国記念日について	・スキー ・戸外活動 ・屋内ゲーム ・豆まき会	・雪除け ・火災予防点検		

死亡の部

氏名	年令	死亡月日	世帯主	部落
三富富三	61	12・5	本人	樋曽
中山コメ	53	12・9	清一	樋曽
水沢治八郎	55	12・8	本人	南谷内
阿部秀秋	0	12・6	平一	夏井
長谷川秀次郎	76	12・11	本人	和納二区
田中セキ	71	12・15	清吉	石瀬
中村トヨ	46	12・12	精司	石瀬
鶴巻ヤス	64	12・22	久作	高橋
永塚トミ	54	12・22	本人	富岡
大越庄作	64	12・31	本人	和納八区
渡辺石松	80	12・30	本人	南内
中村栄	71	12・31	本人	高畑
本間サカ	80	12・26	十郎	石瀬
阿部フミ	64	1・3	芳男	夏井
阿部縫	49	1・4	スミ子	間瀬二区

出生の部

氏名	出生月日	保護者	部落
本間和雄	12・12	十郎	石瀬
池上裕一	12・21	宏	和納二区
武藤公一	12・12	徹士	岩室
槇田明美	12・24	三雄	和納六区
大森進	12・25	康司	西船越
伊藤紀子	12・23	武雄	和納二区
三富恵	12・21	国利	樋曽
金川由美子	12・29	富雄	南谷内
住吉みゆき	12・20	実	岩室
野水祐美子	1・2	栄一	高畑
田島勝幸	12・22	栄治	横曽根
朝妻洋子	1・1	美則	西船越
菅井直子	12・25	憧	横曽根
萩野喜与志	1・8	晴一	北野
金子博英	1・5	金彌	橋本
阿部猛行	1・16	功	油島

おめでた　おくやみ
1月16日まで

二月十七日、巻町公民館で開催されます
未登鉾刀剣所有者は公民館へ連絡ください

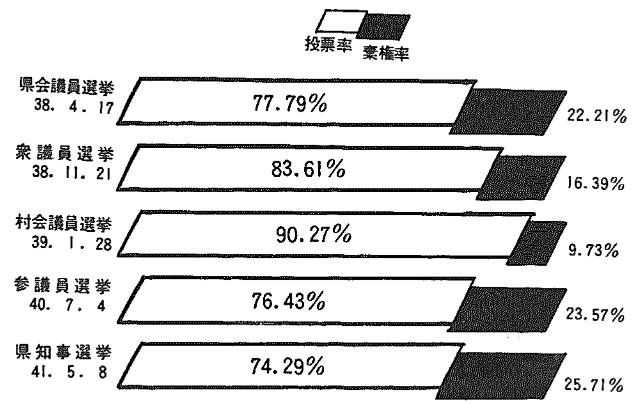
郷土の散歩

名士伝記 ④ 草莽の国学者
高島正興

草莽の国学とは、庶民の国学の意味である。庶民生活に広まったものである。

封建時代の庶民生活は、今日と異り文字通り草莽の生活と呼ぶにふさわしいものであった。武士と庶民の間にきびしい身分差別で分けられ、それが政治経済、社会生活一般、更に学問思想にまで強い影響を、及ぼしている。その時代に生きた。郷土の国学者、『高島正興大人』を見ることによって、文化の身分性及び、地域性のきわ立った特徴、庶民生活と国学の関係や、それがいかなる生活史的意義を持ったかを察知できるのではなかろうか。宝永七年（一七一〇年）岩室の旧家高島家（現旅館高島屋）先代庄左衛門が霊夢に感じ山麓を尋ねて行ったところ鉱泉が湧き、負傷した雁がしきりに、その流れに浴しては岩に憩うていた。正夢なることを知り、直ちに村民と計り正徳三年（一七一三年）爾来次第に繁昌し、何時か湯女を置き、湯女組ができ遊楽の温治場となったので天保十年（一八三九年）同地の村役人より温女組取締規則の請書に添い、岩室村庄屋高島翁右衛門の請書が残っている。ここに草莽の国学者として、名前が見え出される。高島家は岩室算分けの旧家で、近江源氏佐々木氏の末裔と伝えられているが越後の旧家には、同氏を称する者が多い、岩室の湯女は維新以後芸妓となったものであるが、昔から六月二十一日を以って藪入とする慣はしがある。この日は鉱泉を開いた庄左衛門の忌日に当り、その遺徳を永く記念するためであるとゆう、高島正興（翁右衛門）は庄左衛門の後五代目富主で村政指導の反面国学者であった。岩室村誌略伝によると──寛政十一年生れ、安政三年に歿した。江戸の国学者橋守部の門に入り国学及び歌道を学び、敬神崇祖の念深く諸国を旅行し、神社の由緒を調べ宮柱三巻を著し、又京都によって皇居朽廃の状を拝して恐懼し、その修築の費を献じ嘉永二年大神宮の遷宮式典に参列して、神鏡を受けて帰郷し神明社を建て之を奉斎し、村民に敬神愛国思想を鼓吹した。尚幕末の対外関係紛糾に就ても深く憂って、外国事情の研究に努め異国事略四巻を著した。その教養は広く且つ多趣味で歌道の外にも書画、茶道、華道、兵法、典礼等にも通じ、著者には前記の外に神代直語一巻蛇足六巻、千広の浜っと三巻、万葉抄三巻、祭祀の古実一巻、伊勢道の記三巻及び歌集四巻等がある。師橋守部と絶えず音信を交して歌の添削批評を受けたのでその歌稿が沢山あり、著書と共に現在その家に保存せられる。この様な事蹟が記されている。この国学の徒高島正興が天保十年に湯女組の件に就き、請書を提出したのについて、何にか妙な取合せに意外の感を抱かずには居られない。そして、村の長として、土地の繁栄を計り、湯女の事迄に奔走せねばならなかった民間の国学者の生活を想象できる様である。高島正興がどうゆう機会に国学に入り、橋守部との師弟関係はどうして結ばれたのか、これは全く判明しない。高島家は代々学問好きの人が出たらしい。正興の父正貞がその一人で岩室の勝景を詠じた詩があるが巧みな詩風ではないが、農村の旧家の主人の教育を示すものである。良寛が国上山の五合奄に隠棲中に高島家を訪れているが、正貞、正興の時代、共に相識の間柄だったと思われる。正貞が好学の人だったことは確かであるが、国学を奉じたかどうかその事蹟は明らかでない。正貞の子正興は親が詩文に長じていたのに対し、歌に巧みだった。橋守部の学風を受けただけで、ただ風雅の道を楽しむだけに止まらず、敬神愛国の志が深く村人の指導に熱心だった。一ノ宮として、越後人崇敬の的たる彌彦神社の近隣の農民として、生を受けたことが、彼の思想に少からぬ影響を及ぼしていると考えられるが、越後に守部の学統は若干入って居るとは言うものの、正興の環境と越後の国学の伝統とから、国学精神昂揚の機縁は明らかになし得ない。正興が熱心なる国家敬神なることは「拙しも吾真心の言の葉をあはれときこせ皇ら大神」や村の古城跡松岳山を詠んだ長歌にも充分うかがえる。なお正興は伊勢や諸国の社寺を巡拝した記行が三冊ある。これは嘉永七年（一八五四年）隠居した正興が、紀州、山陰、北九州を旅した紀行で、いたる所の神社仏閣に詣で、特に神社の祭神由緒に就て念に調べ神名帳その他の古書の記戦に徴して考證を加え又その興廃の状を見るまま記している。本書は即ち敬神の階梯たる用に供するために記したのであるが、更に子孫に伝えて伊勢詣での案内書としまた神をおろしてかにせぬようにとの老婆心から後代に残すとゆう旨をもって著された書である。したがって普通の紀行文ではなくてその中に国学徒たる著者の精神がこもっている書である。思うに敬神家の参営紀行や諸国巡拝記が多く著されているが、本書のごときは北越における一人の庄屋の神詣での記録として、右の中でも異色あるものと言うべきであろう。又大神営を無事に参拝をすませることができた時の喜びは又格別であった。その喜びの情を長歌に見られる。正興はこうゆう感激を持った人物と思われる、彼の敬神は世俗にありがちの禳災招福祈願の私事にかかわるものでなく清浄純粋なる古代精神復活に基づくものであった。したがって根本精神を忘れ神威を楯に名利を貪り種々の加持祈禱に衣って私腹を肥やす神道界の隋落に対しては鋭い語気を以って非難している。当時大宮司を始め祠官達が金次第で信仰を売り、私欲のために神威を汚している有様を憤って、「うるはしき真綿の内に、けがれたる物つつみたらんにて」と記し神職の隋落は僧呂の神仏習合以上に害を流すと断じているのであって、常に古神道の純粋性を目指す国学の神道思想の片鱗がここに閃いている。

目でみる村勢



基本選挙人名簿登録者推移

年次	確定期日の登録者数			投票所数
	総数	男	女	
38	6,124	2,733	3,391	8
39	6,105	2,729	3,376	8
40	6,102	2,736	3,366	8
41	6,105	2,714	3,391	8